永遠の好敵手

みぃにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永遠の好敵手

【Ｎコード】
Ｎ０２６３Ａ

【作者名】
みぃにゃん

【あらすじ】
風邪をひいているのに無理をして怪盗キッドを演じた快斗は…。

（前書き）

この小説にはまじっく快斗の登場人物が数人出てきますので、一通り紹介しておきたいと思います。

快斗（カイト）＝怪盗キッドの本名、寺井（ジイ）＝快斗の良き付き人、青子（アオコ）＝蘭にそっくりな快斗の幼馴染、中森警部（ナカモリケイブ）＝ご存知の通り、怪盗キッド専任の警部。

「う〜〜ん…」

コナンは、さっきから一枚の紙を見て唸っていた…その一枚の紙とは…怪盗キッドからの予告状だ。
快斗の気まぐれのせいで、今回は暗号になっているのだ。

実は、その暗号を作った張本人は…

「ぶぇっくしゅん！！」

———風邪をひいていた…

「まずいな…今夜は仕事があるのに…」

熱が38℃もあるこの状態では、もはやまずいなどころでは無いのだが…。

「ぼっちゃま…今夜の仕事はお休み下さい…私めが代わりに行きますから…」

隣に居る寺井が、心配そうに言う。

「バーロォ、今夜はあのちっこい名探偵も来るんだぜ？ジイちゃんなんかじゃ、すぐに捕まっちまうよ…」

「し、しかしぼっちゃま…その身体では…」

「大丈夫だって！俺は天下の怪盗キッド様だぜ？…それに、今回の予告状はとびきり難しい暗号になってるしな！」

快斗は、真っ赤な顔でいつも通りにニヤッと笑った。

「しかし…」

「寺井ちゃんは心配しすぎなんだよ！さぁて、そろそろ行くかな…」

ベッドに腰掛けていた快斗は、一気に立った…その瞬間、フラフラッとする…立ちくらみだ。

「ぼっちゃま…」

明らかにヨロヨロと、快斗は歩いていった。

「どうかご無事で…！」

寺井には、手を合わせて祈るしかなかった…。

…こちら現場…

―――どうやら中森警部は、誰かの助言を受けてか、キッドの現れる時間や盗む宝石は分かったようで、厳重に警備をしていた。

しかし、所詮は中森警部…。

快斗は何とかギリギリ、宝石を盗って逃げる事に成功したのだ。

「ハァ、ハァ、ハァ…」

近くのビルの屋上に着地し、柵にもたれかかる。

…と。

「待ってたぜ…気障なコソドロさん？」

既にかすみ始めている景色に、小さな影が浮かびあがる。

———小さな名探偵…江戸川コナンだ———

「（やっぱりあの暗号の意味が分かったのか…）」

それから、コナンは暗号についての説明を始めた。

「…という事で、お前の逃走経路が分かったってワケだ！」

コナンは、得意そうな顔をしている。

「だ…大正解…見事な推理だな…」

コナンはその時始めて、キッドの様子がおかしい事に気が付いた。

キッドの辛うじて柵にもたれかかっていた身体が、段々とずりおちていく。

そして次の瞬間…キッドは倒れた。

「キッド！！」

コナンがキッドの元へ駆け寄る。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ…（クソ…か…身体が…）」

コナンがキッドの額に手をあてる。

「凄い熱だ！！…こいつ、こんな熱で見事に宝石を盗って逃げる事に成功のか…」

それから暫く間を置いて、コナンは言った。

「…これからどうしよう…？」

勿論彼を警察につきだすつもりは無かった。
こんな風にキッドを捕まえても、嬉しくない。やはり、正々堂々と戦ってから捕まえたいのだ。

…だが、このまま放っておくわけにもいかない。

「（この格好のままで病院に連れていくわけにはいかねぇし…）」

コナンは暫く考えた後、一つの案を導き出した。

「（キッドの扮装をといて、素顔のまま病院に連れて行こう…）」

こんな風に素顔を見てしまうのは、少しズルい気もしたが…この際仕方ない…。

コナンはせっせとキッドの扮装をとき始めた。

…暫くして…

―――残りはシルクハットと片眼鏡のみになった。

まずは、ゆっくりとシルクハットを取る…。

中からは、特徴的な癖っ毛が出てきた。

最後に片眼鏡を…。

「（…こっ、こいつは…！！）」

―――数時間後―――

「う～ん…」

「あっ、目を覚ましたみたい！…大丈夫ですか？」

快斗が目を覚まして、最初に飛び込んできたのは青子の顔だった。

いや、正確には青子ではなく蘭だ。

蘭の後ろには中森警部、小五郎…そしてコナンもいる。

快斗はハッとして起き上がった。

自分の顔をペタペタと触ってみるが、片眼鏡も、シルクハットも無い。

服も、普段着…。

「（何で？）」

「あんな時間にあんな所で何やってたんだ？」

中森警部がいきなり話し掛けてきた。

「…怪盗キッドに会おうと思って…」

とりあえず、快斗は適当に答えた。

「なるほど…実はそこにいる、コナンってボーズが快斗君がビルの屋上で倒れているのを見つけてくれたんだよ…。それで、俺がパトカーで病院まで連れてきてやったんだ。」

中森警部が説明する。

「（…なるほど。あいつの仕業か…）」

「…ありがとな、ボーズ。」

快斗は、上辺だけでそう言った。

それから他の誰にも見られ無いように、眼で有難うと言う…今度は本心から。

「別にどうって事ないよ！！」

コナンも、子供らしい上辺だけの答えをする…。

それから、眼で本心を快斗に伝えた。

他の誰にも見られないように…。

――今度会う時は、いつも通り最強の好敵手として…な！俺のそっくりさんよ――

――完――

（後書き）

～作者のぼやき～

み「この作品は、数日前に風邪をひいてる時に書いたものです～。自分が風邪ひいてるのを切っ掛けに、風邪ネタを書いてみたくなった（笑）」

快「…って事は、俺は作者の風邪に巻き込まれたって事か～？！」

み「そうとも言う（笑）」

快「あ・の・なぁ～…」

コ「ところで二人とも…」

み&快「「ん？」」

コ「『馬鹿は夏に風邪をひく』って知ってたか？」

快「冗談じゃねぇっ！俺は作者の馬鹿に巻き込まれたってのかよ？！ＩＱ４００の天才なのに…」

み「……」

快「おい、何とか言えッ！」

み「……」

快「おぉ～い…！」

み「……」

コ「きりが無いので話題を変えよう…ずばり、連載小説はどうしたんだ？」

み「…半分ちょっと出来てたんだけど…」

快&コ「「だけど？」」

み「…間違えて削除しちゃった…」

コ「……聞いた俺が馬鹿だった…もう帰るぜ」

快「俺も…付き合ってらんねー…」

み「あ、ちょっと…！…まいっか！（いいのか）」

み「とりあえず、入れ替わり生活の第三章は…気長にお待ち下さい

な；（誰も待ってないって）」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0263a/

永遠の好敵手

2010年10月10日03時16分発行